

進歩観念のゆらぎ ― コスモロジーへの回帰 ―

間瀬 啓允

はじめに

進歩観念のゆらぎ

人間の自己主張に始まる近代の人間中心主義は、楽天的な科学技術の進歩観念に立脚していた。しかし、科学技術のあり方が疑問視されて、いま「進歩観念」は根底からゆすぶられている。文化の振り子は人間中心主義からの脱却の方向に転じている。「進歩観念のゆらぎ」は人間中心主義からの脱却を意味する。

いま、なぜ「コスモロジーへの回帰」なのか

近代科学の取り組みは、世界を物質と見立てることによって、種々の機械論的で物質的な諸関係を解きほぐすことであった。しかし、この取り組みは、いま根本的に見直されている。有機体論的で、生命中心な取り組みが新たに始められている。「コスモロジーへの回帰」は近代科学の世界観からの脱却を意味する。

エコロジカルな意識の高まり

技術中心的な意識は機械論的な世界観のもとで、物質的、数量的、操作可能なものを賞賛する。その特徴は客観化、原子論化、脱神聖化、消費の終末論への適合である。しかし、その適合は「知」が「痴」化したファウスト的人間の姿を映し出すものではない。そこで健康な「知」の回復を求めて、エコロジカルな意識は「意識の緑化」を目指し、生命中心的、有機体論的、全体論的な方向に向かうのである。「エコロジカルな意識の高まり」は技術中心的な意識からの脱却を意味する。

ホワイトヘッドのコスモロジー

「エコロジカルな意識」になじむコスモロジーは、ホワイトヘッドのコスモロジーである。ホワイトヘッドは、主著『過程と実在』の最終章「神と世界」においてコスモスの運命を問い、これに答えようとしている。そこにはコスモスについての人間的な意味の発見が意図されている。人間の運命はコスモスの運命と不可分に結びついているからである。そこで、神による世界の救済ということが有機体論的に、また関係論的に論じられることになる。「ホワイトヘッドのコスモロジー」は機械論的な体系からの脱却を意味するのである。

一、進歩觀念のゆらぎ

フランス・ベーコン（一五六一—一六二六年）は『大革新』（一六二〇年）のとびら絵に、ジブラルタル海峡を守る運命の柱、ヘラクレスの柱を描いた。この柱の間を船は自由に通過して、もつと彼方へ、もつと先まで進んでいく。それは“Plus Ultra (more beyond)”の標語のもとで、これまでにない全く新しい哲学の到来を告げるものであった。ベーコンは、技術の力で自然を開発することにより、人類の福祉の王国を築こうと夢見たのである。その夢は、かれの死後に出版された『ニュー・アトランティス』（一六二七年）に描かれている。遠い海の彼方に横たわる孤島の王国、ニュー・アトランティスには、この地上にかつて存在したことのないほど高貴な財団があり、これを哲学者集団が組織している。そして、この哲学者集団による財団は、事物の諸原因と隠れた運動についての知識を用いて、あらゆる可能なことがらを成就し、人間の支配領域の境界を拡大することが目的であった。つまり、人間が自然の中心に存在し、自然を自由に変え、終には「進歩」を実現できるという夢を描いたのである。これが“Plus Ultra”「もつと彼方へ (more beyond)」
「もつと先まで進んでいこう」の思想であった。

この思想は、近代以前の西洋にも、東洋にもない、西洋近代にもつとも特徴的にあらわれた思想である。人間の創意工夫の才には際限はない。知識は無限に進歩する。これが新ベーコン学派のモットーであった。さらに、これを継承して、西洋近代に花咲かせていったのが、デカルト派の人々であった。「進歩の觀念」は、このデカルト派の人々の間で展開されていったのである。ちなみに言えば、十七世紀後半から十八世紀初頭にかけて古代人と近代人の優劣を競う論争が展開された。これは西洋の近代思想史に名高い「古代派・近代派論争」といわれるものである。

古代人の信仰では、歴史のはじめに黄金時代があり、後の時代はどんどん悪くなっていく。したがって、「進歩の觀

念」は古代人には無縁のものであった。古代人の信仰では、歴史の進歩観より退歩観のほうが重要であった。これに対して、近代の自然科学に積極的な意義を認め、科学上の諸発見を通して人間の能力に対する歓喜に満ちた承認を与えたのが、デカルト派の人たちであった。この論争の結果、古代人にまさる近代人の優越意識が勝ちをおさめたことはいうまでもない。

さらに、この「進歩の観念」が十八世紀のフランス啓蒙の指導理念になったことを思想史は伝えている。コンドルセ（一七四三—一七九四年）は最後の著作『人間精神の進歩について』（一七九三—一七九四年）のなかで、人間精神は無限に進歩し、完成へと高まると説いた。人類は科学的知識を増大させ、社会福祉を実現し、自由で平等な未来社会へと近づいていくのである。ヴォルテール（一六九四—一七七八年）は『諸国民の習俗および精神についての論考』において、進歩の理念に基づいた人類の文化史をつづっている。²⁾

進歩の観念において注目すべきことは、科学とヒューマニズムの素朴な結合ということである。十七世紀のベーコン学派とデカルト学派からは、「科学的知識は無限に進歩する」という樂觀的な進歩思想が、十八世紀のフランス啓蒙の進歩思想からは、「人間性は無限に向上する」というヒューマニズムの謳歌があらわれて、この両者が結びついていったのである。この点が、西洋近代における進歩の観念において、もっとも特徴的にあらわれた側面なのである。科学技術の勝利を予言する樂觀論者たちにとっては、科学と道徳が結びつくことは自明の前提であった。この意味において、進歩の思想には科学とヒューマニズムの統一という理念がはたらいっていたのである。また、この理念が近代の世俗的宗教の役割を果たし、いわゆる進歩信仰を育て上げていった。「進歩信仰」とは、科学技術の進歩を信じ、人間性の向上を信じるという、近代西洋に特徴的にあらわれた、世俗の信仰であった。

しかし、科学技術の進歩発展と人間性の向上とは直ちに結びつくものであるうか。「結びつく」と考えるのは、近代の進歩信仰にとりつかれて、いまだに近代の問題圏の中から抜け出せないでいることを物語るのではないだろうか。

科学技術の進歩は確かに物質的な豊かさをもたらしたが、これによつて人間精神が向上し、精神的な豊かさが得られたわけではない。かえつて、所有の欲望の増大により環境問題が増大し、弱者へのいじめにより生命倫理の問題が深刻化している。このように、物質的な豊かさと精神的な貧しさとの同居という現実的な側面から考えてみれば、いまわれわれのなすべきことは、進歩信仰には距離をおき、これに厳しく批判的な態度で臨むということではないのか。実はこのことが、いまわれわれの自覚すべき真の「現代の問題圏」を意味するのではないのか、と思うのである。

二、いま、なぜ「コスモロジーへの回帰」なのか

宇宙物理学は、宇宙の構造や宇宙の形状について詳細に論じることができるようになった。だから、いま「コスモロジーへの回帰」なのかという点、そうではない。宇宙のことが科学的にわかつてきたからではなく、かえつて人間の運命がわからなくなつてきたからである。宇宙における人間の位置は何なのか。宇宙の中で人間はどのような位置にあつて、どのような役割を果たすように運命づけられているのか。人間は何を目指して生きていったらいいのか。科学はこのような問には答えてくれない。否、このような問に答えるようにはできていないのである。しかし、近代科学が「宇宙論」をつくりだす以前から、「コスモロジー」は世界の中で人間の位置を示し、人々に自らの故郷を教え、死後の運命を指し示す役割を果たしてきたのである。「コスモロジー」の語る「コスモス」とは、秩序を持った美しい宇宙であり、そこには神と世界と人間の魂との内的な関係から成る秩序があつた。しかし科学的宇宙論は、当然のことながら、このような「意味としてのコスモス」の語りを避け、これらの問に答えることを哲学にゆだねた。ところが、哲学のほうも、近代の「科学哲学」の立場から、コスモスについての意味の語りを避け、その構築を怠つたままであつた。そこで、

世界の中での人間の位置とか、人間の魂の故郷とか、死後の運命については、問われても、学問的に受け止め手のないままにされていた。ただし、このような間に答え得たかどうかは別として、少なくともそれに答えようとしてきたのは、あるいは答えてくれるものと期待されたのは、オカルトや神秘学や宗教であった。^③

このような状況下で出版されたのが、ステイーヴン・トゥールミンの『リターン・トゥ・コスモロジー』（一九八二年）であった。^④ シカゴ大学哲学教授のトゥールミンは、この著作の中で、二十世紀半ばを過ぎて次第に顕在化してきたポスト近代科学の潮流を展望し、それは新たな自然宗教であり、自然神学であるという議論を展開した。

宗教の観点からみると、「リターン・トゥ・コスモロジー」は「信」の宗教から「全体知」を基礎とした靈性への変化と軌を一にする。「知」を重視する「靈性」は、キリスト教やユダヤ教の「信」に対抗しようとしたグノーシス主義の「知」とあい通じる。グノーシス主義の「知」とは、コスモスの由来や本来の自己の認識であつて、これこそが「聖なる知」、「全体性の知」をいうのである。近代科学は機械論的な自然像を提示し、主体と客体を分離し、全体から切り離された部分へと関心を移していった。これは近代科学の「還元主義」の側面である。これに対し、ポスト近代科学は「還元主義を超え」ていく。それは有機的に複雑な相互性の関連から構成された全体を見ること、主体と客体の双方が織り込まれた関係の網の目を見ること、自然の中に超越的なものの現われを見ることを主張した。これが「リターン・トゥ・コスモロジー」の試みとなる。「知」が神的なものに関わることが当然と受け止められ、新しい「靈性」の可能性に期待する運動がはじまる。「全体性」を尊ぶ思潮が展開する。「自分探し」「本来の自己の探究」が、自己超越的なニュアンスを含んだ「自己実現」の道となり、ここに救いが求められるようになる。宗教学者の島園進（東京大学教授）は、この現象を「新靈性運動」とか、「新靈性文化」という言葉で的確に表現しているが、これこそがポスト近代科学と自然宗教／自然神学の潮流なのである。^⑤

近代科学は物質を自然とすることによつて、科学として成功してきた。しかし、それは人間の運命、人間の魂の問題

を度外視するという大きな代償を払ったうえのことであつた。魂と切り離された物質とは、元來、加工の対象としての質量でしかなかった。しかし、自然とか世界というものは加工の対象であるだけでなく、共感の対象、共感的存在でもある。人間にとつての意味を切り捨ててしまつては、「コスモロジー」は人間の位置、人間の運命を示すものとはならない。この点で、ポスト近代科学の潮流は「リターン・トゥ・コスモロジー」となる。そして、新たな自然宗教／自然神学は本来の自己を見つめさせ、無意識をも含めた本来の故郷を見出させることを助ける。「汝自身を知れ」というデルフォイ神殿の柱に刻まれていた言葉には、ひよつとすると、次に「されば宇宙のすべてを知らん」という言葉がかくされていたのかもしれない、と哲学者の坂本賢三（一九三一—一九九一年）⁶はいう。けだし至言である。

三、エコロジカルな意識の高まり

ポスト近代科学の潮流のもとでは、技術中心的な意識からエコロジカルな意識への変容が見られる。この「技術中心的な意識」というのは、機械論的な世界観のもとで、物質的なもの、数量的なもの、操作可能なものを賞賛し、消費の終末論へと適合していく意識のことである。

「消費の終末論」という言葉には注釈が必要であろう。これは「消費だけが人間生活の最終目標」とする議論である。精神的な諸価値が崩壊し、超越的な目標も忘却されると、ただ消費だけが生活上の全面的な目標となる。こうして、消費だけが生活上の救いとされると、これがいわゆる終末の状態である。この状態では、精神的なものや本来的な価値の世界などは空虚なものとされ、代わつて物質的なもの、客観的なもの、冷ややかな合理的なものだけが新しい神々とされる。このような終末論のもとでは、やみくもな消費だけが盲目的に求められることになる。

消費の終末論への適合者は、「知」が「痴」化したファウスト的人間の姿を映し出す。いまここで自己の満足のためだけに人生を謳歌しようと考えたならば、それは「知」が病んでいる姿を浮き彫りにした「ファウスト的人間」の姿である。人生は一回限りのものなのだから、たとえ何を、そして誰を犠牲にしても、仮にそれが未来世代の破壊とエコロジカルな環境破壊を意味しようとも、自分の好き勝手に生きればよいのだと考えるならば、それは「知」が「痴」化した「ファウスト的人間」の姿である。この姿は、強奪的な技術の現われと、むきだしの力の高揚と、それと同時に起る精神性の衰退を浮き彫りにしている。

技術のもたらす恩恵は大きい。しかし、二十一世紀に生きるわれわれにとって、技術中心だけの意識は脅威である。効率の良さが求められ、思いやりに根差した配慮がなくなっていく。技術はアグレッシブになり、貪欲になりすぎて、いまでは悪夢とさえなりつつある。たとえば、巨大になりすぎた軍事技術、貪欲になりすぎたクロールンや遺伝子操作の生物科学技術は、その好例ではないか。振り子は遠く離れた方向に揺れてしまった。いまわれわれは新しい均衡状態を求めなければならない。

エコロジカルな意識は「意識の緑化」を求める。それは機械論に反対し、全体論を強調する。大きな複合的な全体は、エコロジカルな生活環境や人間生命などという部分部分の構成要素に還元することはできない。これは機械論的な体系の合理性に投げかける一大挑戦的な意識の表明である。

一九九〇年代の早い時期に、宇宙全体を畏敬の念で眺める思想を編み出したヘンリック・スコリモフスキー（ミシガン大学名誉教授）は、「エコ・コスモロジー」という言葉を使って、エコロジカルな意識の高まりを表現した。それが六角柱の図柄に示された「意識のモデル」（図参照）の曼荼羅である。

この曼荼羅によれば、エコロジカルな意識は機械論的な意識から生じ、そして同時に、それを超えていく。それは機械論的な意識とエコロジカルな意識とが、ともに歴史的なものであることを示している。また、そうであるからこそ、

さらに意識はエコロジカルな形態をも超えていくことを示唆している。

健康で健全な人間の「知」は、全体論的で、質的に高い小宇宙を映し出す。そのような「知」は、消費という瑣末なことを超えて、どこまでも「生きる意味」を追い求める。そのような「知」は、何らかの霊的な道の途上にある。意味の追求は霊的な追求に通じているからである。

四、ホワイトヘッドのコスモロジー

エコロジカルな意識になじむコスモロジーは、現代イギリスの哲学者アルフレッド・ノース・ホワイトヘッド（一八六一—一九四七年）のコスモロジーである。

ホワイトヘッドの名著である『過程と實在』（一九二九年）には、「コスモロジー試論」という副題がつけられている。これは、本書において体系的に述べられている諸概念や諸区分がすべて一つの世界観へと引きよせられていくことを意味している。ホワイトヘッドの「プロセスの神」は、第五部第二章、つまり『過程と實在』の最終章「神と世界」にお

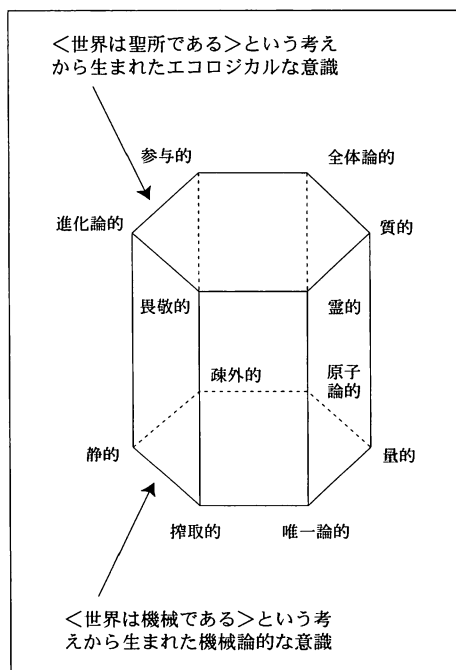


図 意識のモデル

いて極まるが、同時にこの箇所が、コスモロジーに関する最重要部分を成している。ホワイトヘッド自身序文の中で、第五部はコスモロジーの問題を考察するべき究極的方向についての最終的な解釈に関わっていて、結局「コスモスはどういうことになるのか」というコスモスの運命を尋ねて、これに答えようとするものだ、と述べている。したがって、「プロセスの神」の極まりは、同時に、コスモスの運命についての答えでもある。

『過程と実在』の最終ページに向けて極まる神の概念は、「神の両極性」という考えである。最終章第三節の初めの部分にこう述べられている。

神の本性には省略することのできない別の側面がある。……神の世界に対する原初的な動きの点からみれば、神は具体化の原理であり、そのかぎりでは、神の本性の原初的側面だけが、これまでのところ関連をもっていた。

ところが、神は原初的であると同様、結果的でもある。……神の概念的本性は、その最終的完結性のゆえに変化しないものであるが、神の派生的本性は世界の創造的前進の結果生じるがゆえに、結果的なのである。

こうして、神の本性は両極的である。神は原初的の本性と結果的の本性を持つのである（『過程と実在（下）』ホワイトヘッド著作集第十一巻、六一四—六一五頁）。

ここに明確に述べられていることは、神は世界との関係において、本性上、両極的に機能する、ということである。神の「原初的の本性」は概念的に知られる神の本性であり、これは神の抽象的本質である。これに対して、神の「結果的の本性」は経験的、自然的に知られる神の本性であって、神の具体的現実性である。「原初的」として神はリアルではないが、「結果的」として神は、本性上、すぐれてリアルであり、アクチュアルなのである。というのも、神の結果的の本性は現実的世界の実現のことであり、神の原初的の概念に神の十分な感じと意識を織り込むことによって、神が「十全に現実

的なもの」となるからである。

そこでホワイトヘッドは、神の結果的本性を最もよく思い抱くことのできるイメージとして、優しい配慮と無限の忍耐ということをいう。「優しい配慮」とは、救いうるものはすべて救って何も失うまいとする神の配慮のことであり、「無限の忍耐」とは、神自身の本性の完成により、中間的世界の動揺を優しく救済する神の忍耐のことである。

ここには結果的本性としての神の「感応性」ということが含意されており、この含意によつて、「神は愛である」という基本的な宗教的言明の意味が回復される。ホワイトヘッドの神の観念に基礎をおく現代アメリカのプロセス神学は、その中心的な使信の意味をこの結果的本性における神の感応性において回復する。神の愛、アガペーとは同情的感応性のこと、つまり同情共苦の感応的愛のことなのである。これをホワイトヘッドの有名な言葉でいえば、「神は偉大な仲間、理解ある（一連托生の受苦者）である」（『過程と実在』（下）六二五頁）。

主著『過程と実在』の最終章に極まるホワイトヘッドの神の観念は、「神の両極性」の理論、より正確には「神の本性における両極性」の理論であつた。要するに、「原初的」として、また「結果的」として、一つの全体としての神が、その本性において二つの側面、二つの極を持つということ、またこの二つの側面、ふたつの極を持つ神が、世界と関わる場合に、「原初的本性」として、また同時に「結果的本性」として機能する、ということであつた。したがつて、世界との関わりを抜きにして神だけを語ることは、神の具体性を欠いたままの、空しい語りになる。また逆に、神との関わりを抜きにして世界だけを語るならば、それは無目的に流動するだけの、ただの喪失のなかにあるものについての語りとなつて、それだけでは世界は空しく見捨てられたものに終わる。時間的世界の事実は「過去が消え去り、時間が絶えず滅する」ということであつて、世界はこの事実からの解放を求めている。そこで神は、神の具体的現実性としての結果の本性において、これを実現する。というのも、神の結果的本性というのは、「生成し消滅していくものが永続する神の本性のうちに残されていく」という神の側面のことだからである。こうして世界はその運命としての消滅から解放さ

れる。つまり、神によって世界は救済されるのである。したがって、神を抜きにして世界だけを語ることは、まったく論点を失した、的外れのことになるのである。

ここに見られる神と世界の関係は「汎在神論的」である。「神と世界の内的関係」がいわれているからである。神と世界は「対照的対立者」として、相互の要求のうちに立っている。ホワイトヘッドのよく知られた言葉でいえば、次のようになる。

神が恒常的で世界が流動的だというのは、世界が恒常的で神が流動的だということと同じく、真である。

神が一で世界が多だというのは、世界が一で神が多だということと同じく、真である。

世界が神に内在するというのは、神が世界に内在するということと同じく、真である。

神が世界を超越するというのは、世界が神を超越するということと同じく、真である

(『過程と實在(下)』六二〇頁)。

どのような点においても、神と世界とは、それらの過程に関して相互に逆に動いている。たとえば、神は原初的には一である。しかし過程において、神は、結果的には諸多性を獲得し、それを統一性へと吸収する。これに反して、世界のほうは、原初的に多であるが、しかし過程において、世界は、結果的には統一性を獲得する。こうして神は、世界が多にして一と見なされうるとは逆の意味で、一にして多と見なされうるのである。このようにしてコスモロジーの主題は、「永続的統一性へと移行する世界の力動的努力の物語であり、そして世界の多様な努力を吸収することにより、完全の目的を達成する神のヴィジョンの静的威厳の物語である」(『過程と實在(下)』六二二頁)と言われるのである。

以上が、コスモロジーの問題に対するホワイトヘッドの解答である。「コスモロジーへの回帰」とか、「コスモロジー

の再興」ということが言われている現況下、ホワイトヘッドのそれは、そうした今日的な問題を半世紀もまえに先取って与えられた、一つの啓発的な解答だったと言えるであろう。

もしもホワイトヘッドのコスモロジーがあまりにも宗教的にすぎるといのであれば、そのときにはホワイトヘッドが抱いた哲学的な信念に思いをはせるべきであろう。かれにとつては、「コスモロジーはあらゆる宗教の基盤であり、およそコスモロジーを示唆するものは、すべて宗教を示唆した」（『過程と実在（下）』六二二頁）のである。これがコスモロジーについてホワイトヘッドの抱いた、確たる信念だったのである。

付 記

本論考は、本年三月二十九日、法政大学市ヶ谷キャンパスにおいて開かれた「第二十七回日本イギリス哲学会研究大会」のシンポジウム、「進歩観念の形成と展開」の発表のために準備されたものである。後日、このように、論考としてまとめられたものであることを付記しておきたい。

注

- (1) ピーター・メダワー『進歩への希望』（千原呉郎他訳）東京化学同人、一九七八年、一六九―一七三頁。
- (2) 桑原武夫「進歩の思想、その変遷について」、『科学と人間のゆくえ』湯川秀樹対談集Ⅱ所収、講談社文庫、一九八一年、三七五―三九五頁。
- (3) 坂本賢三「コスモロジー再興」、『哲学五 自然とコスモス』新岩波講座所収、岩波書店、一九八五年、二―四頁。

- (4) スティーヴン・トゥールミン『リターン・トゥ・コスモロジー』一九八二年。邦訳は『ポストモダン科学と宇宙論』（宇野正宏訳）地人書館、一九九一年。
- (5) 島園進『グノーシス主義と精神史の現在』、『グノーシス 異端と近代』（大貫隆他編）所収、岩波書店、二〇〇一年、三五〇―三五二頁。
- (6) 前掲の坂本論文「コスモロジー再興」の締めくくりの言葉である。
- (7) ヘンリック・スコリモフスキー『エコフィロソフィー―二十一世紀文明哲学の創造―』（間瀬啓允他訳）法蔵館、一九九九年、三三四頁。
- (8) この点で、常と比較の対照とされるのが、西田幾多郎の「仏」理解をめぐる思想である。西田は「仏あつての衆生、衆生あつての仏」と述べて、仏と衆生の関係を「逆対応」とか「逆限定」という概念で捉えた（場所的論理と宗教的世界観）西田幾多郎哲学論集Ⅲ、岩波文庫、三二八―三三九頁）。これに対してホワイトヘッドは、神と世界とは「対照的対立者」であり、たがいに「相互の要求のうちに立つている」と述べて、軌を一にする思想を展開している。したがって、西田とホワイトヘッドの比較思想は人口に膾炙している。

参考文献

- シドニー・ポラード『進歩の思想』（舟橋喜恵訳）紀伊国屋書店、一九七一年
- ガンサー・ステント『進歩の終焉』（渡辺格他訳）みすず書房、一九七二年
- ピーター・メダワー『進歩への希望』（千原呉郎他訳）東京化学同人、一九七八年
- ステイヴン・トゥールミン『ポストモダン科学と宇宙論』（宇野正宏訳）地人書館、一九九一年
- 坂本賢三「コスモロジー再興」、『哲学五 自然とコスモス』（新岩波講座）所収、岩波書店、一九八五年
- 島園進『グノーシス主義と精神史の現在』、『グノーシス 異端と近代』（大貫隆他編）所収、岩波書店、二〇〇一年
- ヘンリック・スコリモフスキー『エコフィロソフィー―二十一世紀文明哲学の創造―』（とくに最終章「エコロジカルな意識」）（間瀬啓允他訳）法蔵館、一九九九年。

ボール・クンツ『ホワイトヘッド―秩序への冒険―』（とくに最終章「秩序のヴィジョンと救済する秩序」）（二ノ瀬正樹訳）紀伊国屋書店、一九九一年。

ウィリアム・シュテーター「現代宇宙論から科学と宗教の対話へ」、『宇宙理解の統一をめざして』（ジョージ・コイン他編、柳瀬陸男監訳）所収、南窓社、一九九二年

田中裕『ホワイトヘッド』（とくに第三章「有機体の哲学」の成立）と第四章「過程と実在」のコスモロジー）講談社、一九九八年。

間瀬啓允「ホワイトヘッドにおける宗教・哲学・科学」、『イギリス思想の流れ』（鎌井敏和他編著）所収、北樹出版、一九九八年。
同右、「ホワイトヘッドの思想と現代的課題」、『プロセス思想研究』（遠藤弘編著）所収、南窓社、一九九九年